

# 柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話:070-1503-6401/044-988-0004

http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo

第147号

## 現代に生きる祖先の知恵 ～先人の知恵を現代科学が証明する～

板倉敏郎 (元柿生中学校校長 元柿生郷土史料館相談役)

新型コロナウイルスが地球上の人間を脅かして、もう半年となりました。何万年という人類の歩みの中で、恐怖におののき知恵を絞りながら生きてきたその証として、疫病退治への知恵が今日にも伝えられ生きています。今回はそれらが現代の科学でも実証されていることが多々あることを考えてみたいと思います。

### 【茅(チ)の輪とチマキ】

柿生文化第144号に「茅の輪」の話をしましたが、なぜ疫病除けに「茅(チ・カヤ)」の輪が使われるのでしょうか。「茅(チ)」には「霊力」や、何か薬学的な「力」があるのでしょうか。王禅寺東の琴平神社では毎年6月末から「茅の輪」が設置されています。

奈良時代初頭に編集された歴史書『古事記』『日本書紀』あるいは日本最古の歌集『万葉集』などを見ると「イカズチ(雷)」「ミズチ(水の霊)」「オロチ(蛇)」「ククノチ(木の霊)」「ノツチ(野の霊)」「シホツチ(潮の霊)」「コチ(東風)」など自然物の威力・霊力を表現する語として「チ(霊)」という語が度々使用されています。

「血」「乳」「茅」も同様に霊力を備えたものであると感じていたようです。和歌によく登場する「チハヤブル(千早振る)」という言葉は「神」に懸かる枕詞ですが、「チ」(霊力)がハヤブル(激しく動く・活発になる)という意味に使われます。人が多くの荒ぶる自然に遭遇するとき、自然の中に働く霊力や「畏怖」に対する感覚でしょう。

さて、「茅(チ)」にはどんな霊力を感じていたのでしょうか。『日本書紀』に天の岩戸に隠れた天照大神を外に出してもらうために天鈿女命(アメノウズメノミコト)が岩戸の前で、茅の葉を巻き付けた矛(ホコ=両刃の剣で柄を付けて槍のようにして使う)を持って踊りを舞うという場面があります。日本書紀には『手に茅纏(チマキ)の矛を持ち』と書かれています。この行為には茅に対して何か神聖で、何らかの意味を持った行為であると考えられます。

一般的に5月の端午の節句になりますと、笹の葉で包まれた「粽(チマキ)」を食べたことがあると思います。「チマキ」の「チ」は「茅」と考えられ元々は、笹の葉ではなく「茅の葉」であったと考えられます。「チマキ」は笹や茅の葉の殺菌力で大変腐りにくく出来ています。平安時代には京都の祇園祭にチマキを作り疫神の牛頭(ゴズ)天王にチマキを献ずるとともに、これを食べることにより自らも災厄疫病から逃れると考えられていました。その背景には茅や笹の薬効の「力」を感じ取っていたのでしょう。

以前、北海道の畜産試験場で出された研究論文『ササの効用』にはササ類の抽出物に制癌効果や肝炎、肝機能障害、火傷に対する薬効、抗炎症、抗消癌、その他防腐効果、免疫性亢進効果が認められたことが論述されていました。

茅は、葦(アシ・ヨシ)、萱(カヤ)、芒(ススキ)、笹(ササ)等、みな稲科の植物で、ある程度共通の特性を持っています。これらの植物は、湿地帯に多く生息しています。特に鉄分の多い湿地帯では、茅の根の周りに水酸化鉄が付着します。大きさは長さ1cm から5~6cm、直径5mmから1~2cm くらい以上の円筒状に成長します。この鉱物は濁鉄鋼(カッテッコウ)といい、別名可愛い姿から「高師小僧(タカシコゾウ)」とも言います。以前、柿生周辺で葦の生息している湿地帯で濁鉄鋼を採取した人がいたことを耳にしたことがあります。この鉱物の学名はリモナイトと言われ、九州の阿蘇山で大量に採掘されています。優れた防腐や殺菌効果があり水質浄化作用を持っていることも分かっています。

このように、現代の科学では「茅」を始め稲科の植物の殺菌、浄化作用、免疫力亢進などの薬効が認められています。祖先は科学的に理解できないものの長年の経験と直感でこれ等の「力」を知り、いろいろな方法で疫病対処法を後世に伝えてきました。現代人は「迷信だ」とか「非科学的だ」と言って、一笑に付してしまいがちですが、祖先の知恵は決して侮れるものではありません。逆に祖先の方が先を行っていたのかもしれない。

(参考資料:「古事記」「日本書紀」「万葉集」「ササの効用」)



鶴見川流域の中世  
その7

多くの武士が割拠した鶴見川流域

中西望介(戦国史研究会会員・都筑橋樹研究会会員)

鶴見川流域に盤踞した武士たちを見てみよう。流域では小机六郎基家と名乗る人物が「桓武平氏諸流系図」に見えるのが、文字資料に現れた最初の武士であろう。基家は中世の胎動期である12世紀前期に活躍した武士で、その子孫から河崎・中山・渋谷の諸氏が出ている。流域の他の武士達もこの頃に各地に根を下ろしたと思われる。

鶴見川流域の武士が『吾妻鏡』などの史料に登場するのは12世紀末期である。『吾妻鏡』や古文書から平安時代末期～鎌倉時代前期の武士を検出すると、鶴見川本流では小山田・鴨志田・

市尾・都筑・中山・小机・加世・鶴見・潮田・師岡、恩田川では成瀬・恩田、矢上川では渋口など多数の武士があげられる。(安達は性格が異なるので除いている)

これを同時代の多摩川流域の武士と比較すると、小沢(小沢郷)・細山・菅生(菅生郷)・稲毛(稲毛庄)・丸子(丸子庄)・河崎(河崎庄)などであり、その数は鶴見川流域に比べて少ない。稲毛・丸子・河崎は庄園を名字とする有勢な武士であろう。その出自を見ると、小沢・稲毛・丸子・河崎は武蔵国の有力在庁官人で大武士団である秩父平氏の一族であり、菅生は秩父平氏に次ぐ有力武士団である横山党の一員、細山は西党(武士団)の一員である。

さて、鶴見川流域にもどって武士を見てみると、小山田(小山田庄・保)・加世(賀勢庄)を除くと庄園を名字とする武士は見られない。他は国衙領である郷を名字とする武士で、これが多数を占めている。鶴見川流域の地形の特徴である谷戸と丘陵を基盤として、中世の胎動期に「郷」が形成されて、その郷を本拠地として武士が生まれたからである。それぞれの出自をみると横山党・秩父平氏・都筑党、さらに出自不詳の武士が多数を占めている。

成瀬は横山党の隆遠(藍原次郎大夫)の三男時綱の子孫は成瀬を名乗っている。小山田・中山・小机・師岡・渋口は秩父平氏の出自であり、都筑は都筑党の武士と思われるが、はっきりしたことがわからない謎の多い武士である。

鶴見川流域の武士は幾度も入れ替わっている。それは治承寿永の内乱、源頼朝亡き後の鎌倉幕府内部の権力闘争、鎌倉幕府滅亡から南北朝内乱、享徳の乱以降の戦国争乱、豊臣秀吉による小田原北条氏討伐などの戦乱によるもので、前代の武士が一掃される事もあった。

武士が入れ替わる背景には、鶴見川流域が武家の都「鎌倉」、江戸幕府の都「江戸」の後背地であるという事情と密接に結びついている。「鎌倉の主」や徳川将軍家にとって、鶴見川流域を安定的に支配する事は重要な政治課題であった。ここで言う「鎌倉の主」とは鎌倉将軍家や執権北条氏、南北朝～室町時代に鎌倉にあって関東を支配した鎌倉公方足利氏を指している。鎌倉は源頼朝が幕府を開いてから、鎌倉公方足利成氏が古河に移るまでの約350年間武家の都であり続けた。

言うまでもないことであるが、鶴見川流域は武家の都「鎌倉」、江戸幕府の都「江戸」の武士達にとって日常生活に必要な食料や消費財(薪炭・灯油・竹木等)の供給地であり、戦争になれば「都」を守る防衛線の役割が期待されたからである。その様な意図から自立志向が強い有力武士は「鎌倉の主」によって排除されて、平安時代末期～鎌倉時代前期の武士の多くは姿を消して、鎌倉時代中期の流域では将軍の直轄領、執権北条氏一門の所領、将軍所縁の深い鶴岡八幡宮寺や建長寺などの有力寺社の所領に入れ替わっている。室町時代には足利氏所縁の寺社領、戦国時代には小田原北条氏の一族や譜代重臣の所領が置かれた。江戸時代には旗本領や将軍家御霊屋料が数多く置かれている。時代の変革に伴って度々武士が入れ替わったので、鶴見川流域に英雄・豪傑や有力な戦国大名が生まれなかった。そのことは、地域住民が共同体を基礎に地域社会を形成していくうえでプラスに働いたと考えられる。(つづく)

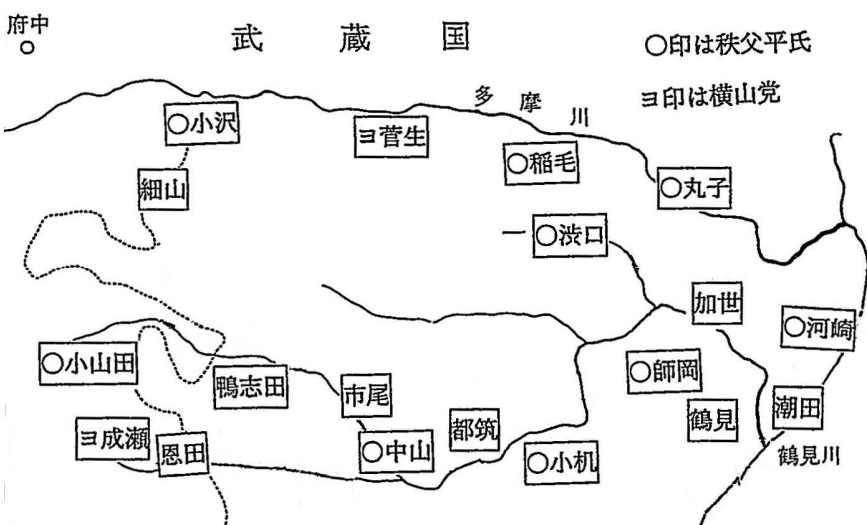


図 中世初期における武士の分布

シリーズ  
教育の歩み 第3部

## 日本の学校と教育(3)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

## ◆寺子屋の展開過程 その1◆

それでは、明治5(1872)年の学制の公布によって、公教育としての初等学校の設置が始まる以前、戦国末期から江戸時代初頭に起源をもつ寺子屋(ここでは寺子屋の語が定着する元禄時代以前の手習い所も含めて寺子屋と呼ぶことにします)は、いったいどのくらい存在したのでしょうか。先号に記したように、藩校はほぼ正確に学校数を数えることが出来ますが、寺子屋の場合は、正確な数を知ることははなはだ困難です。旧柿生村10ヵ村をとっても、王禅寺の久保倉塾のように、筆子塚によって存在は実証されても、開塾と閉塾の時期の分からない塾が結構あるのです。そればかりか、今日残されている寺子屋についての最も包括的な史料は、明治16(1883)年に文部省が、日本全国の寺子屋の遺跡を調べる悉皆調査を命じた時の調査報告書なのですが、結果的にこの調査では、埼玉県や奈良県など7県の記録が欠けているなど、不完全な記録に留まってしまっているのです。こうした不完全さを理解した上で、この調査記録に残された寺子屋の年代別の開塾数を整理してみると、以下のようなことが分かります。



応仁の乱が始まった 1467 年から、徳川2代将軍秀忠が亡くなり、3代家光が即位した 1623 年までの156 年間の開塾数は17塾に過ぎず、年平均の開塾数は 0.1塾と10年に1校の塾が誕生したに留まっています。長い戦乱で疲弊しきった庶民にとって、先ずは生活の再建が先決だったのでしょう。それが3代家光時代の1624年から4代家綱の死去した1680年までの56年間では、38校の塾が誕生しています。開塾数は増えていますが、まだ1年1校には届かず、なお3年で2校が誕生するペースに留まっています。これが5代綱吉から8代吉宗までの元禄や享保を含む1681年から1735年までの54年間になると、開設塾は56塾と毎年1校が開塾するに至り、以後1780年までの45年間には123の寺子屋が産声を上げ、毎年3校近くが誕生しています。これが寛政年間(1789年~1800年)になると、12年間に165校が開校と、年間14校近くが開塾する開塾ラッシュを迎えています。19世紀に入ると、庶民の子女に対する教育熱はさらに高まり、天保年間(1830年~1843年)には14年間で1,984塾が開塾(毎年140以上の塾が誕生)しています。黒船来航の嘉永年間には毎年240の塾が、安政年間から慶應年間(1854年~1867年)にかけての14年間には、年平均306校の4,293塾が誕生しています。なお、明治改元後も1千校以上の寺子屋が産声をあげていますが、さすがに開塾数は年を追って減少してゆきます。



長かった戦国乱世を終わらせ、「惣無事令」を発して、戦国大名間の紛争や村落間の争いなど一切の私戦を禁止して、日本列島に平和を齎したのは、豊臣秀吉でした。秀吉は、他に優越した武力を背景としていましたが、戦をやめれば所領を安堵するという巧みな説得によって、島津、毛利、伊達など遠隔地の戦国大名の同意を得て、戦国の世の幕を引きました。徳川家康は、秀吉方式を継承して「惣無事令」引継ぎ、何と265年間に及ぶ「平和の時代」の基礎を築きました。庶民にとって、最高の善政は戦のない平和な世の継続です。平民の多数を占める農民も、江戸や大阪などの

都市に住む商人や職人などの町人も、後顧の憂いなく生産活動に励むことが出来るからです。そこに戦国末期に各地に登場して、地域の中小領主を配下として広い地域を一体として支配したスター大名たちが、大河川の治水工事や灌漑工事を実施して、それまで放置されていた河川周辺の低地に広がる沖積平野を、豊かな水田耕作地帯に生まれ変わらせる基礎を築いていた効果が加わります。平和な時代の到来が、農民たちの沖積平野への進出を可能とし、開発をさらに加速させたのです。肥沃な沖積平野は、豊かな水田地帯に変貌を遂げ、徳川幕府の誕生から綱吉時代に至る60~70年間に、日本の耕地面積を約3倍に、人口を2.7倍に増やしたのです。こうした変化を背景に小農民の自立化も進み、結果として農業生産力はさらに向上し、国内全体としての商品流通も活発化したのです。商売繁盛は、当然に商いのあれこれを文字で記して漏れのないようにする必要性を自覚させます。子供時代の手習いの必要は、先ずは町人の世界で必要とされ、各地で寺子屋の誕生が待たれることとなったのです。(続く)

寺社の  
歳時記

### 琴平神社 大祓式・茅の輪くぐりについて

琴平神社宮司 志村幸男

令和2年も半年を過ぎ、全国の神社では6月末に大祓の神事が執り行われました。大祓式は主に年に2回、6月と12月に行われる行事であります。また重要な祭典が行われる際には、臨時の大祓が執り行われます。古来我が国は、1年を二つに分ける考え方の上に立っていたとされており、それぞれの節目に当たる6月と12月の晦日、すなわち半年毎に、知らず知らずの内に身につけてしまった罪穢れを祓い清め、元の清浄な心身に立ち返るため、また新たな一歩を踏み出すために行われる行事が大祓です。現在、全国の神社で行われている大祓式は、宮中儀礼としての大祓に茅の輪くぐりなどの民間の除災信仰が習合して、更に明治の旧儀再興、大正の次第改正、神社本庁による制定といった変遷を経て伝えられております。

当社では、儀式殿境内に設けた祓戸(はらえど)において大祓式を執り行います。大祓詞の宣読、裂布(きりぬの)・解縄(ときなわ)の儀の後に、大麻・切麻にて祓いを行い、宮司・神職に続いて参列者皆で茅の輪くぐりを致します。茅の輪くぐりが終わり、最後にお納め頂いた、罪穢れを移した人形(ひとがた)を忌み火にて焚き上げます(本来であれば、川や海へ流します)。全ての儀式が罪穢れを祓うためのものであります。

例年であれば多くのご参列の元で大祓式を行い、ご参列の皆様と列を作って茅の輪くぐりを行うのですが、本年は新型コロナウイルスの感染予防のため、儀式殿内で神職のみの斎行と致しました。

さて、この茅の輪くぐりで使われる「茅の輪」。これをくぐることで何故お祓いになるかということ、鎌倉時代中期に編纂された「新日本紀」の「備後国風土記逸文」の中に以下のように記されております。

『備後國風土記曰 疫隅國社 昔 北海坐志武塔神 南海神之女子乎與波比爾出 座爾曰暮 彼所將來 二人在伎 兄蘇民將來 甚貧窮 弟將來富饒 屋倉一百在 伎 爰武塔神 借宿處 惜而不借 兄蘇民將來 借奉 即以粟柄爲座 以 粟飯等饗奉 爰畢出坐 後爾經年 率八柱子還來天詔久 我將來之爲報 答 汝子孫其家爾在哉止問給 蘇民將來答申久 己女子與斯婦侍止申 即詔久 以茅輪 令着於腰上 隨詔令着 即夜爾 蘇民之女子一人乎置天 皆悉 許呂志保呂保志天伎 即詔久 吾者 速須佐雄能神也 後世爾疫氣在者 汝蘇民 將來之子孫止云天 以茅輪着腰在人者 將免止詔伎(釋日本紀卷七)』

簡略に訳しますと、これは武塔神(素戔嗚尊 スサノオノミコト)が旅の途中に宿を求め、貧しいながらも快くもてなした蘇民将来に、その礼として、茅の輪を腰に付けることにより疫病から免れられると教え、そうしたところ將に蘇民将来の一族が疫病から免れ、以降疫病があった際には、腰に茅の輪を付けることとなったという事が書かれております。この故事に倣い、茅の靈的な力を以て疫病(えやみ・はやりやまい)のみならず、災厄、罪穢れを祓うためのものとして用いられております。

6月に行われる大祓は「夏越の祓」と言われ、和歌にも「水無月の 夏越の祓する人は 千歳の命 延ぶと言うなり」と歌われており、これから迎える夏本番を前に、穢れを祓うと共に、息災を祈るものでもあります。新型コロナウイルスの脅威が未だ衰えず、諸事、感染に気を使っての生活を送っていることと存じます。「祓」の祈りの元に、新型コロナウイルス感染症が一日も早く終息することを祈念し、平穏な暮らしが送れる世になることを心よりお祈り申し上げます。



平成30年夏越の大祓 茅の輪くぐりの様子

## 柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

**8月** 1・8・22・29日(毎土曜日) **9月** 6・20・27日(毎日曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (8月15日、9月13日は休館です)

### 第18回 特別企画展

### 続 戦中・戦後の教科書展

柿生中学校の創立70周年記念事業に、協賛する形で開催した、戦中・戦後の教科書展は、幸い好評のうちに終了となりましたが、皆さまから、再度実施してほしいとの声もあり、2017年10月以降に、新たに見つかった戦前・戦中の教科書も相当数に上ることから、新発見の教科書も加えた形で、ここに改めて、「続 戦中・戦後の教科書展」として、再度教科書の特別展を開くこととしました。現在の教科書との違いを、しっかりご覧ください。

期間 6月27日(土) ～ 9月27日(日)

会場 柿生郷土史料館特別展示室